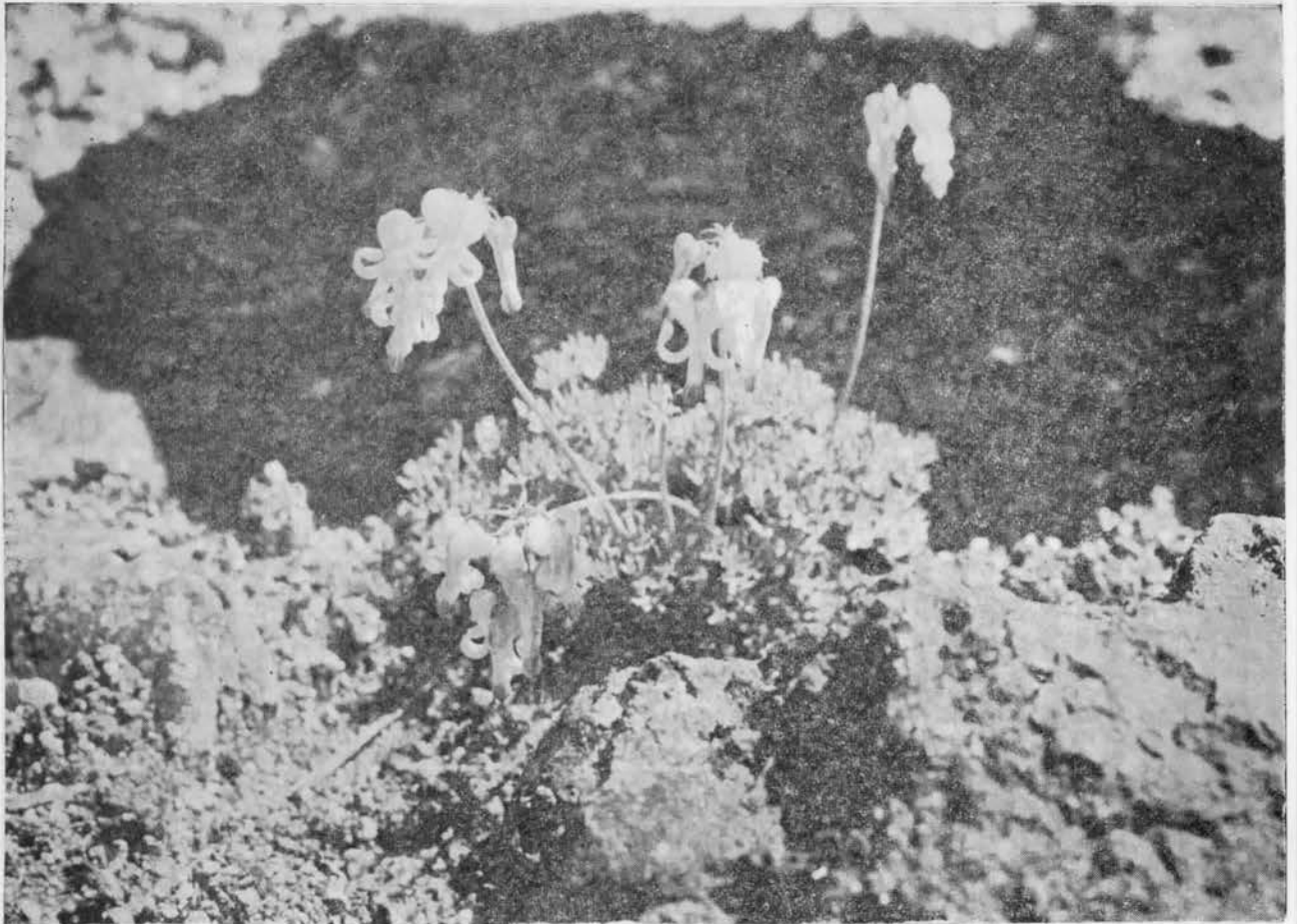


山と博物館

第12巻 第6号 1967年6月25日 大町山岳博物館



農具懐古

博物館展示室の一隅にある「滅びゆく農具」に目がふれ、かつては実際に自分で使用した経験もありなつかしく感じられるものがある。その一つ、引ウスは現在使用されて居る全自動稲摺機の一部である脱フ部に当る。あのウスに引綱をつけ左右交互に引ばって籾の脱フ作業を行い玄米にしたもので、未だこの引ウスは農家に残されて居るものもあるでしょうが、ほとんどがたき物か又は帯戸の腰舂となってしまうことと思われる。各農家では収穫も終り冬季に入る前に通称「ヒキヤ」と呼ばれ引ウスの上部に漏斗をおき、これから落ちてくる籾を摺りむき、更にこれをトアオリにかけて風選後トオンにかけ玄米と籾を選別する。この作業を幾度となく繰り返す、なか／＼大変な作業である。

はたして一日どの位の玄米をつくられたものか不明だが、夜となく昼となく繰り返す目前に迫る冬ごもりにこの作業を続けたと聞く、然し現在の農家では小型軽量化された農機具を持ち、春の起耕にはじまりオーアシ、又はハコアシを使用したような強湿田でも、短時間に起耕、代かき作業が耕うん機により行われ、引ウス・トアオリ・トウシにかわる籾摺機が、センバ種こきにかわる脱穀機ができた。大きな木製の踏スキは深耕を目的としたものか、何れにしても往時としては便利な農機具であったことは事実である。

千歯いねこきの前は割ばし風なものに穂穂をはさみしごいて籾をおとしたとかきくが千歯いねこきになる足踏いねこきの出現に、人々は目をみはったことは想像するまでもない。これ等の「滅びゆく農具」は時代のかわるにつれます／＼貴重な存在である。

博物館としても館で展示しきれないこれ等資料を広く来館者の方々にみていただくべく努力したい。
(館長・成沢祥人)

スピッツベルゲンの旅 (1)

太田 昌 秀

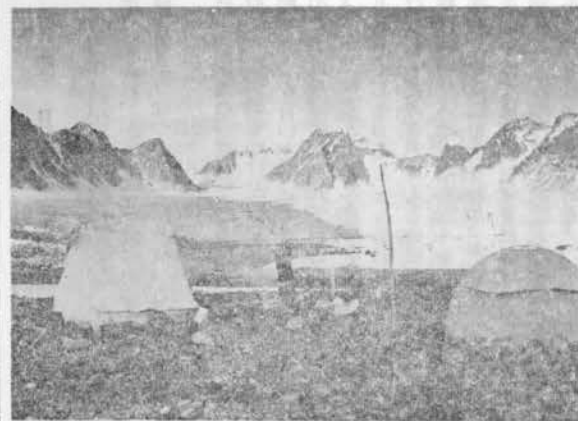
私は、一九六六年の夏、ノルウェーの極地研究所の人達と一緒に、北極にとても近いスピッツベルゲン島という島へ探険に出かけた。ノルウェーは、大変北にある国で、本土は北緯五八度から七一度までである。日本の昭和基地が南緯六九度であるから、ノルウェーの北端の方がずっと極に近いわけであるが、この国

スピッツベルゲン



では、北緯七〇度あたりには人口数千人の町があったりする。これは北アメリカの東岸に沿って北上してくるメキシコ湾流がヨーロッパの西岸を流しているからで、暖流の運んでくる熱量はとて大きなものだと感じさせられる。夏になると、この暖流は更に北へ伸びて北極海の氷をとかしてゆく。スピッツベルゲンは、ノルウェーの北端から船で二昼夜のところにある。いくつかの島の集った群島で、その面積は北海道から西南部の半島をとった位の広さであるが、大部分は氷河に覆われていて、夏の間だけ海岸に露岩が現われる。オスロで氷のとけるのを待っていた探険隊は七月一日に北ノルウェーへ飛んで、それから、比較的静かな航海に恵まれ、五日にはスピッツベルゲンに着いた。四月から八月一杯まで昼間が続く極北の島は、ほとんど裸の山々に氷をかぶって、遠くから見ると青くかすみ、物音一つしない静かな別世界であった。

この島には、ノルウェーとソヴェトの炭坑が二つあって、数千人の労働者が越冬しながら働いており、私達の船はこの炭坑から石炭を運ぶ貨物船だった。ノルウェーの炭坑町には、労働者のアパートに混って、極地研究所の宿泊所があり私達はここで二日待機して、漁船のりかえ更に北へ向った。宿泊所は、U字谷の底にあって、一層位上流まで氷河が押し出してきていたが、谷底の平地には、沢山の草花や苔が緑をまきちらしていた。待機する間、若者達は、町の人達とサッカーをしたり、氷河へ登ったりして遊んだ。私も、氷河の上へモレーンに混っている植物化石をとりに行ったり宿舎付近の草花を集めたりしてすごした。探険隊には何人かの植物学者もいて、いろいろ教えてもらったが、間もなく忘れてしまった。彼等の観察を見ていて感ずるのは、決して植物を取らないことである。一五年も前に、はじめてこの島の植物を系統的に調査した人の採集帳を研究所から持ってきていて、すっかり変色した古い押葉の標本と比べながら観察し、ひきぬいて根の長さなどを見ながら観察し、ひきぬいて埋めておくことを忘れなかった。植物学者がそんな風だから、植物を研究していない人は決して花をとったりしない。こういうことは、誰も取ってはいけないと注意するわけではないのに、みんながそうして当り前のことになっている。



スピッツベルゲンのキャンプ地

その後、私は二人の助手と共に、島の北西部で一カ月半キャンプ生活をしたが、その時にも時々感心することがあった。この島には夏の間、沢山の海鳥がやってきて産卵し、秋にはまた南へ帰ってゆく。彼らのうち大型で水上を滑走しないと飛べないものは狐に襲われないために、沖合の小さい岩島に巣をつくる。石の間のわずかな苔の上に、親鳥の柔毛だけで巣をつくり、二、三ヶの卵を産む。海アヒルの卵は空色で褐色の斑点があり、鶏の卵位ある。二〇m四方位の島に、数百の海アヒルが巣に入っているのは壯観であった。石を見に行つてこういう島にぶつかると、ノルウェーの地質屋は、石もたゞかずに早々にひき上げてくる、鳥の逃げないように注意して数枚写真をとる位である。それは、親鳥が巣を離されると、上を旋回しているトウゾクカ

モメが急降下してきてすぐに卵をぬすむこと、親鳥が一五分以上卵から離れるとその卵はかえらないと云われているからである。私達のまわりの日本の子供や若者は、こんな卵を見つけたら大喜びして、取つてどうやって食べようかと考えるのではないかと思う。実は私自身もその時そう思って、帰り道につくづく考えさせられ、恥かしいことだと思った。そして、一ヶ月ほどたって、山々に初雪がきた頃、いろんな鳥達が、ゲンコツ一つ位の大さきの雛鳥の一隊を従えて、氷山の次第に多くなってくる海に浮んでいるのを見かけるようになった時、あのとき卵焼きにしくなくて良かったとしみじみ思った。

北緯八〇度にもなる極北にもかゝらず、夏のスピッツベルゲンは生命に溢れている。山では幾組の子連れの雷鳥にもあった。はじめに出会ったときは、一二羽もの雛をつれていたが、一〇日後に会った時は、雛が二羽になってしまっていた。狐やトウゾクカモメに襲われたり迷子になったりして次第に減

り、育つのは何羽もないのだろう。八月一日には初雪が降った。餌になる植物も雪の下にかくれ、氷と岩の世界にやがてオーロラと月の光しかない冬の季節がやってくる。その厳しい環境の下で、外の鳥がみんな南へ帰ったあとに残され、とぶことのできない雷鳥だけが、さびしさと寒さにたえて暗黒の冬を生きぬいてゆく、その頃は、アザラシの数も増え、白熊も氷のうらに下下してくるだろう。狐は銀白色の冬に着かえて氷の上をさまようだろう。その上、人間共が、あちこちにワナを仕かけて、馬鹿な女共のコートを作る

使、丸の町



ために銀狐をとらえようとする。

かつて、この島をめぐる海には、沢山のグリーンランド鯨とトドが住んでいたのだが、一七世紀から一八世紀にかけて、イギリス、オランダ、デンマーク、ノルウェーなどの捕鯨によって、完全にとりつくされ、鯨はほとんど絶滅し、トドの姿もほとんど見かけないという。北極で鯨を取りつきたヨーロッパ人共は、次は南極洋へ出かけて行ったわけだ。今でこそ、生物種保護と称して捕獲量制限などをきびしく主張する西欧諸国も、つい先頃までは、鯨をささ絶滅させるような悪いことを尺山やってきた野蛮人であった。

最近の国日本でも、私達の園日本でも、最近には特に農業などのため、いくつかの貴重な動物達が絶滅しかけてきているという。後の世になって、私達の時代が、あんなにも沢山の生物種を地上から消してしまったという汚名をきせられないように努力すべきではないだろうか。人間もこういう動物達に囲まれて、それらとの生態的連鎖関係の中で安定して生きていられるわけである。他の生物達が安心して生きてゆけないような環境の下では人間もまた生きてゆけないことを覚るべきである。

(北海道大学 地産教室・理博)

人間が外国に対する支配を得た方法のうちで、最も重要なものは、かがれがどんな食物でも食するということである。ほかの動物が同じ力を得ていたものとするれば、現在これらの間に存在するほどの大きな多様性と特殊化は一つとして生じなかつたであろう。イギリスの生態学者チャールズ・エルトン(Charles Elton)はこのようにのべている。動物の種の地位は複雑・微妙に配列されている食物環のどこに地位を占めるかによって決定されるが、高度の雑食性の獲得は、食物環による支配から独立することを意味している。このよ

ドブネズミの共食い

宮尾 嶽 雄

うな、人間のめざましい特質にせまろうとしているのが、ドブネズミ(Rattus norvegicus)である。これに伴って、思わぬところにドブネズミによる被害が発生する。昆虫や鳥の卵、雛を食べるのももちろんのこと、ニワトリやアヒル、シチメンチョウ、更に仔ブタや仔ヤギまで襲われることがある。北海道では秋に産卵のために川をのぼってくるサケをとるといいうし、冬、池にかこつておくコイを全滅させることもあるという。東京のまんなかで、赤ちゃんがドブネズミに食い殺されたというようなニュースさえ、ここ十年間だけでも何回か新聞紙上に現れた。

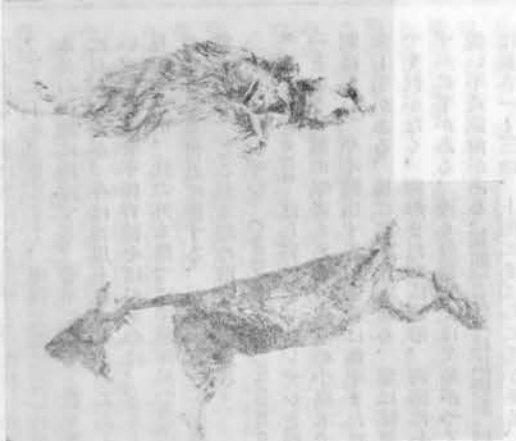
私どもがネズミの採集のためにパチンコ式のワナをかけ、翌朝ワナを見を廻ると、毛皮だけがワナに残されていたり、無残に食い荒された残骸だけが残されていることがしばしばある。これもドブネズミによるもので、パチンコにかかって死んだ個体の傷口の出血部位

などから食べはじめ、前肢で毛皮をひきくり返すようにして、次第に中の肉をたべていく。頭骨の一部、四肢骨の末端などを残すだけで、すっかり食いつくす事が多く、その場合には写真にみられるように、毛皮はすっかり裏返しにされている。

このような例はイギリスでも報告があり、ドブネズミの巢のまわりには、ハッカネズミやクマネズミの殆んど完全に裏返しにされた毛皮のみが、しばしば見出されるということであり、積極的に他種の個体を襲うようである。

以前にも本誌上でのべたように、ドブネズミは汎世界的に分布しているが、地方的な特殊化を殆んど表わしていない。本種が高い生理的恒常性を維持して適応力が大きいことと共に、ドブネズミによる高次の雑食性の獲得がその基礎となっていることは疑いない。

(信州大学医学部第二解剖学教室)



信州植物寸景

横内 齋

(その五)

菅平高原の注意すべき植物、菅平高原は、

小県郡真田町にある美しい芝原の大高原で、四阿山火山と根子岳火山の両山の裾野に広がっている。両火山は、この高原の東北に連つてそびえ、四阿山は海拔二二三三・九mを、根子岳は二二七・九mをかぞえ、その裾野はゆるやかな傾斜面となつて西南に広がり、菅平、四阿の両高原を形成している。厚い火山灰の堆積層の下は多孔質の熔岩の堆積なので、保水量はきわめて悪く、高原は常に乾燥しているの、それを追う草本はシバでよく発達し、春から夏にかけて秋九月頃まではまったくの美しい芝原となつており、点々と生えるシラカバやヤマエンジュの緑が美事である。しかし中腹以上はシラカバの密林で、まことに眼にも鮮である、一五〇〇m以下は大体カラマツの栽植林となつてゐる。

放射谷は、中ノ沢、大明神沢、唐沢ノ滝沢となつて、美しい冷たい湧水が流れ、いずれも神川に合流している。本県企業局は、中ノ沢の合流点より少し上流で神川をせき止め、発電、田用水などに利用しようとしてその工事が着々と進んでいる。

植物は前記したように、乾燥原であるのでその種類、群葉等も見ると程のものもなく山もまた高度がそういぢるしく高くないので、高山植物も注意すべきものはないが、四阿山のガンコウランの群落はまことに見事である。上記した沢沿いには、各種の植物が発達してやや見られるが、残念にも近年人手が多く入りその群落はおいおいとせばめられてゆく、神川の上流一畑余は、巾は狭いが見事な高木の湿原で、種類こそ少ないが亭々と立つ、たけの高い一斉林は、この菅平の名物と

して永久に保存したいものである。

さてこの菅平の特記すべき植物は、ハイマツやタカネヒカゲノカズラなど、種々あるが、そのなかでもというものを選んでみた。次の七種を挙げることに誰も異議はないではないかと思う、エゾノオオサンザシ、カラフトイバラ、シバタカエデ、ツキヌキソウ、ハナヒョウタンボク、クロミサンザシ、グンバイヅルである。

エゾノオオサンザシ *Crataegus jozanensis* Schneider ばら科 単にエゾノオオサンザシともいう。エゾサンザシに合せる学者もいるが、原種に比するに幼葉、花序、萼等に白軟毛を密生し、葉は広い楕円形をなしているのが異なるといふ。本高原の大明神沢で今から三、四十年前、当時の上田中学校の教諭であった横沢末氏が見出したと記憶している。ヤチザクラの異名もあることだから神川上流の野地にも産すると思う、従来北海道産のものと考へられていたが、当地にあることは植物地理上興味ある問題で、本種の南限地である。

カラフトイバラ *Rosa Martreii* Lev. alie ばら科 またヤマハマナスともいふ、灌木で枝は無毛、後にするどい刺がでる、托葉は膜質、小葉は七〜九個小楕円形でやや鋭頭、上面にわずかに伏毛があるか無毛、下面は白色を帯び腺がある、花は帯紅色で美しい、萼筒は球形で先端が伸長する、白毛を密生する、果は球形で赤熟する、東地、北海道の海岸を飾るハマナスの山地性の小形版と思へばまああである、朝鮮、満洲、樺太、シベリアに分布し、わが国では北海道と信濃に産する、菅平には非常に多く、高原中にいたる所に

産する、この外本県では松代町郊外の地蔵峠?と聖山の一角にわずかに産する、大陸との共通種である。

シバタカエデ *Acer Miyabei* Maximowicz var. *mono* Maximowicz かえて科葉形の珍らしいカエデで、高さ一〇m以上にも達する。

古い枝は灰白色で、若枝と共に毛がない、葉は短い立毛が密生し柄があつて対生する、五角形で掌状に五裂し、裂片は先が細まり両側に波形のあらい鋸歯がある、両面に毛がある、花序は今年のものびた若枝の頂に生じ、翼果は水平に開く、本高原の特産であつたが、近時奥原弘人氏は、これを木曾開田村に得たといふ。

ツキヌキソウ *Tristemon sinuatum* Maximowicz すいかずら科 日本では本属に属するものは本種一種のみである、多年性の草本で、全体に膜質の軟毛がいぢるしくつく、茎は高さ六〇〜八〇cm、葉は卵形または楕円形、全縁または湾入する缺刻がある、基部は狭く、時々合さつて貫通する、これが和名の起りである、花は上の方の葉腋に一、二個で柄はない、花冠は淡黄緑色で、内側は紫褐色をおびる、果は卵球形で、三稜がある満洲、ウズリ、アムールに分布し、ここ菅平のもの早くから知られ、県の自然文化財に指定されている、ここにはカラフトイバラ程ではないが、割合に多く産する、本県ではこの外に植科部と、諏訪市、茅野市、上伊那町の守尾山連脈中にわずかに産する、本県のみに産し、大陸との共通種である点は注目される。

ハナヒョウタンボク *Lonicera Maackii* Maximowicz すいかずら科 若枝は鈍稜があつて短毛をつける、葉は膜質で卵状長楕円形、基部は大体円く短かい柄となる、中肋の両側、縁におよびとくに花時には両面に少し軟毛がある、梗ははなはだ短かい、苞は線形で子房より少し長い、小苞は合さつて二浅裂

して縁に毛がある、花冠は白色、外面に少し毛がある、果は球形で赤熟する、朝鮮、満洲、アムール、ウズリ、中国北部に産しわが本州の山地に稀産する、菅平にはもと数ヶ所に見られたが、今は神川上流の湿地のみに残つてい、文部省菅平体育館そばのもの、どうも見当らない、此の外本県では中軽井沢(香掛)の星野温泉付近に産する、これも大陸と共通種であり、ここが本種の南限でもある。

クロミサンザシ *Crataegus chlorostachya* Maximowicz ばら科 エゾサンザシと同一という見解の学者もある、落葉の小高木で刺は太い、やや開出する、若枝は無毛または少し毛がある、後に暗紫色となる、葉は膜質で光沢がなく、卵形または広卵形、両面にわずかに毛がある、浅く分裂または欠刻がつく鋭い不斉鋸歯がある、鋭頭で基部は広楔形柄は長さ一〜三cm、上面にまばらに毛がある、花序はやや花数が多く、無毛またはわずかに毛がある、花は白色、萼筒は狭卵形、やや鋭尖頭で反曲、雄ずいはやや長く、花柱は五個、北海道とここ菅平に稀に産し樺太に分布すると大井博士は記しているが、私はまだ採らない、これもここが南限である。(つづく)

お願い「山と博物館」の購読者をつのつております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

低地栽培で咲いたコマクサ(山博) 撮影 千葉彬司

山と博物館 第12巻第6号 一九六七年六月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.F.I.大町(二二一)

印刷所 大町市下仲町 山岳博物館

大糸タイムス印刷部